

チュニジア世界遺産の旅 (2019年2月6日～2月13日)

「チュニジア」と言うとな何を思い浮かべますか？ チュニジアは「カルタゴ」の興亡の歴史で有名ですが、最近では2015年に発生した「チュニジアテロ」で日本人旅行者3名を含む18名が死亡した事件でさらに有名になりました。

また2010年に自由民権運動としてチュニジアでスタートした「ジャスミン革命」は「アラブの春」へ広がってアラブ社会に混迷をもたらし、その後「シリアの内戦」へと繋がっていきました。

2015年の「チュニジアテロ事件」以降、日本の外務省はチュニジアに「レベル2」（不要不急の渡航は止めてください）という危険情報を出していましたが、昨年4月からかなりの地域で「レベル1」（十分注意してください）に引き下げたため旅行会社によるツアーが再開しています。ただし国内には「レベル2」や「レベル3」（渡航は止めてください）の地域もかなりあります。

今回はフェニキア人によるカルタゴ建設、その後のローマ、ビザンチン、イスラム、オスマン帝国、フランスによる支配・保護に続くアラブ人の定着と激動の歴史を残す世界遺産と、青い海と白い家が美しいと評判が高いチュニジアを訪れたいと思います。

チュニジアという国

「チュニジア共和国」の人口は約1000万人、広さは約16万km²で日本の本州の約半分です。アラブ人が98%を占めており、ほとんどがイスラム教徒（スンナ派）で、公用語もアラビア語ですが、フランス語も広く普及しているそうです。首都のチュニス北緯37度、仙台くらいの所にあります。



(国旗)



(国章)

まあ、これくらいの予備知識で「チュニジアの旅」に出かけましょう。

1日目 旅の初めに

22:00羽田の国際ターミナルに集合して真夜中00:30の出発です。

サービスがいいこと、美人のアテンダントさんがいることで定評のあるエミレーツ航空のEK313/B777-300機で先ずドバイまで約11時間のフライトを楽しみます。

ドバイに早朝06:15に到着して、約3時間待って、09:00発のチュニジア行きEK313/B777-300機に乗り換えて約6時間半のフライトを楽しみました。日本とチュニジアの時差は8時間です。



ところで、チュニジアには世界遺産が8つもあるそうですが、どこにあるのでしょうか？
今回の旅では8つの世界遺産全てを巡ります。



2日目 スース

チュニス・カルタゴ国際空港に到着後、2時間バスで移動して「サヘル（地中海沿岸地方）の真珠」と呼ばれているスースへ向かいます。

スースは紀元前9世紀、フェニキア人によって建設されたチュニジア第3の都市で、アラブの雰囲気漂うリゾートエリアとしても有名な土地です。



メディナ内のグランドモスクはアラブ時代の851年に建てられたモスクで要塞の役も果たしていました。



スーク（市場）も活気がありました。オレンジなどの柑橘系がおいしそうです。



やや疲れましたが、この日の観光を終えてド派手なイルミネーションで飾られたスース・パレスホテルに到着しました。このホテルでは2連泊するのでほっと一休みです。

翌朝、町を歩きましたが町の中央にハビブ・ブルギバチュニジア共和国初代大統領の騎馬像がありました。ジャスミン革命を経た今も人気は高いそうです。



更に歩いて行くと地中海に面した大きな港に出ました。
スースは重要な地中海貿易港だそうです。



3日目 ケロアン

スースからケロアンに続く道の両側には世界4位の生産量を誇るオリーブ畑が続きます。

2015年に起きたテロ事件後落ち込んだ観光客を呼び戻すことを目指して道路工事が行われていました。



ケロアンはイスラムの世界ではメッカ、メディナ、エルサレムに次いで4番目に重要な聖都です。

ミナレット（塔）は35mあり、世界に現存するなかで最も古いと言われています。

ケロアンのグランドモスクに7回お参りするとメッカに1回お参りするのと同じ有難味があるそうです。



礼拝堂の扉はレバノン杉に装飾が施されており、内部は男女の礼拝場が左右に分かれています。



シディ・サハブ霊廟へ賑やかな音楽を鳴らしながら一団が入って行きます。
先頭のえんじ色の服を着た二人の少年達が「割礼の儀式」を受けるそうです。



シディ・サハブ霊廟は美しいアラベスク模様のタイルが使用されています。



アグラブ貯水池は9世紀、アグラブ時代に14箇所造られ、現在も4箇所が浄水場として使用されています。売店のおじさんがパフォーマンスをしてくれました。



クロアンのメディナも賑やかです。デーツ（ナツメやし）を車いっぱい積んで売っています。



レストランでブリックとカムニーアの昼食をとりました。

ブリックはクレープに卵・パセリ・ツナなどを包んであげたものです。

カムニーアは牛肉と牛の肝臓を茹でてクミンソースで食べる庶民食だそうです。



エルジェム

スースからバスで1時間ほどの所にエルジェムの町があり、闘技場（コロッセオ）を観光しました。

この遺跡は3世紀頃にエルジェムの植民市がローマに対抗するために作られたもので、35000人も収容でき、世界で3番目に大きな闘技場で、保存状態も大変良いということです。



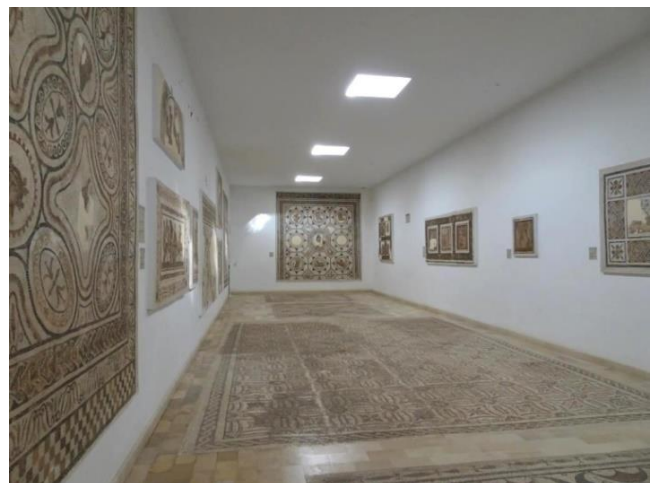
闘技場では剣闘士が猛獣と戦います。

剣闘士も猛獣も地下室で待機をし、ここからエレベータで地上に上がってきます。



エルジェムの闘技場の近くにエルジェム博物館があります。

ローマ時代にオリーブを生産してローマに輸出して財を成した大富豪の家を博物館にしています。



モザイクは大理石や色のついた石や陶器の小片で模様を作るもので、床や壁に飾られていました。膨大な出土品はこの博物館に展示されると共に、国立のバルドー博物館にも展示されています。



4日目 ナブール・ケルクアン・ボン岬

この日チュニス北方にある親指のようなボン岬半島にあるナブール、ケルクアン、ボン岬を観光します。

ナブール

ナブールは陶器を作るための良質の粘土が取れて昔から有名な陶器の町でしたが、レコンキスタ（キリスト教団によるイベリア半島の再征服活動）によってスペインのアンダルシアから追われてきた陶器職人たちが加わり、技術が融合して発展したそうです。



ケルクアン

ケルクアンはボン岬の近くにあったフェニキア人の都市で、ほぼ400年間存在した後、第一次ポエニ戦争の間に放棄されたそうで、この町は1952年、考古学者シャルル・ソマージュによって偶然に発見されました。カルタゴの遺跡などは、フェニキア人の町を破壊してその上にローマ人の町を作った遺跡ですが、ケルクアンの遺跡は小規模ですがフェニキア人の遺跡として残っている貴重な遺跡だそうです。



ボン岬

レストランで昼食をとりました。オジャは炒めたピーマン・魚介類などをトマトソースなどで煮込んだものです。



ボン岬は風が強いので風力発電に適しており、チュニジア全国で設置されている200基の風力発電機のうち、ボン岬には50基が設置されています。



チュニス

チュニスはチュニジアの首都で北アフリカ諸国「マグレブ」を代表する人口約110万人の近代都市です。さて、今日の観光はここまでで、チュニスの新市街の中心地ハビブ・ブルギバ通り沿いにあるデラックスなホテル・アフリカにチェックインし、14階から町を写してみました。下の写真の右端に時計塔が見えますが、2011年のジャスミン革命を記念した「1月14日広場」（革命広場）です。



下の写真左側は町の中央部、右側はメディナ（旧市街）の方向です。



「1月14日広場」に出かけました。

内務省前にはバリケードが設置され、車が入り込めないようにはなっていますが、革命の緊張感はありません。騎馬像はハビブ・ブルギバ初代大統領です。



中央部にある独立広場の「I ♥ Tunis」のマークの前が記念撮影スポットになっています。

こちらの銅像はチュニジア出身の中世の歴史学者・哲学者イブン・ハルドゥーンだそうです。



ハビブ・ブルギバ通り沿いのカフェは大いに賑わっていますが、客はほとんど男性、しかもノンアルコールという事でやや特異な感じがします。

フランス門を通過してメディナに入ります。

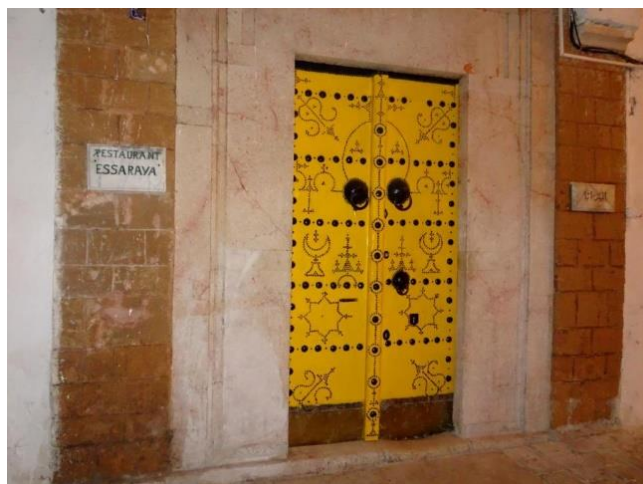


メディナの中は混みあっていますが、職人が金属のお盆に名入れをしていました。

グランドモスク前には老若男女がノンビリと座っていました。



メディナ内の迷路を進んで店に入り屋上に上がるとグランドモスクのミナレットが見えます。
本日の夕食はメディナの中のレストランでと言われましたが、いかつい鉄の扉の向こうには何があるのでしょうか？



扉を開けると昔のお屋敷を改装したという立派なレストランがありました。
食事のバックグラウンドとして、That yasminafiellil さんがウードの演奏と唄で「ジャスミンの木」などを演奏してくれました。
ジャスミンはちょうど日本の桜のようにチュニジアの国民から愛されているんですね。



5日目 イシュケル国立公園

この日はチュニスから約1時間バスで移動してチュニジア北部のイシュケル国立公園に行きました。海水が流れ込むイシュケル湖はヨーロッパから飛来する野鳥や野生動物を観察できる場所として人気を集めています。フラミンゴや電柱の上に巣を作っているコウノトリも見かけましたが、最近は飛来する鳥の数が減っているそうです。



この地が世界遺産に指定される前から住んでいる人達が湿原で羊を放牧しています。オリーブが圧倒的に目に入ってきますが、サボテンやアーモンドもよく見かけました。



約2時間バス移動をしてドゥッガの手前のレストランでイノシシ料理を食べました。この辺りは標高約500mの丘陵地で昔からイノシシ料理が名物だそうです。癖もなく美味しい食感でした。



ドゥッガ

ドゥッガはアフリカ大陸を代表するヌミディア・ローマ・ビザンチン複合遺跡として、チュニジア国内で最も保存状態が良いと言われています。

この地はもともとヌミディア王国の都市でしたが、紀元前1世紀にローマ帝国の支配下となり、約70haの広大なエリアには考古学的にも価値の高い遺跡が広がっています。

野外劇場で3500人の観客が芝居や歌を楽しんだようです。



ジュピター神殿が建つキャピトルはフォルム（公共広場）を中心に、古代ローマの神々をまつる神殿群、凱旋門、野外劇場、邸宅、城壁、水道、売春宿、奴隷市場などの遺構が残されており、当時の繁栄を伝えています。



オリーブの木の中に建っているリビコ・ピュニック廟はヌミディア人の指導者を記念したローマ以前の遺跡ですが、イギリス人が碑文を持ち出した際に崩壊し、後にフランス政府によって再建されたそうです。



6日目 カルタゴ

チュニスの郊外にあるチュニス湖の東岸にある古代都市カルタゴへ出かけました。

カルタゴの始まりはおおよそ紀元前9世紀頃、レバノンに本拠地を置いていた海洋民族のフェニキア人が植民市として建設しました。その後、紀元前6世紀頃には交易で栄え、領土も北アフリカ沿岸からスペインのイベリア半島の半分までに拡大し、西地中海の中心的都市となっていました。

第1回ポエニ戦争ではカルタゴとローマがシチリア島を主戦場として戦い、ローマが勝利してシチリアを占領しました。

第2回ポエニ戦争ではカルタゴの勢力圏にあったスペインからハンニバルが象に乗った軍隊を率いてイタリア半島のローマ本土に侵入し、カンネーの戦いで大勝しましたが、ローマは将軍スキピオの指揮によって逆襲し、カルタゴの近郊ザマの戦いでハンニバル軍を破り、カルタゴは再び敗れました。

第3回ポエニ戦争で紀元前146年にカルタゴはローマに滅ぼされ、ポエニ戦争は終結しました。

アントニヌスの大浴場は第15代ローマ皇帝のアントニヌス帝が2世紀に造った大浴場の跡です。



第3回ポエニ戦争では3年間の籠城戦の後、市街戦でピュルサの丘の市街は火に包まれ17日間にわたって燃え続け、生き残った5万人のカルタゴ人捕虜は奴隷にされたそうです。

その後、ローマ人がフェニキア人の町の上に自分たちの町を作っています。

ピュルサの丘にサンルイ教会が建っています。1890年にフランスによって建てられたもので、1270年十字軍の遠征に参加し、チュニス包囲戦中に没したルイ9世に捧げられたものです。



ビュルサの近くにフェニキアの繁栄を支えた商業港と軍港の跡があります。

5ディナール札にハンニバル将軍の肖像が描かれています。1ディナールは約40円です。



シディ・ブ・サイド

チュニジアブルーの町並みが美しいシディ・ブ・サイドを散策しました。

シディ・ブ・サイドはチュニスから北東20km程度の距離にあり、地中海に面した岬の丘の上に白壁の家が立ち並ぶおしゃれな街です。近くには大統領の官邸や、大金持ちの別荘も沢山建っています。



お土産屋さんや喫茶店が並んでいます。



ゴザ敷きの喫茶店でミントティーを飲むのがオシャレだそうです。
ドーナツ屋さんも美味しいと評判です。



白壁に青いドア、ファティマ（預言者ムハンマドの愛娘）の手のドアノッカーが特徴です。



シディ・ブ・サイドの昼食はレストランでシーフード料理（鯛の塩焼き）を食べました。
この町にはヨーロッパからの旅行者も多く、おしゃれなレストランでの食事が人気のようです。
夕食も魚料理で、鰯のトマト煮でしたが、こちらもいい味でした。

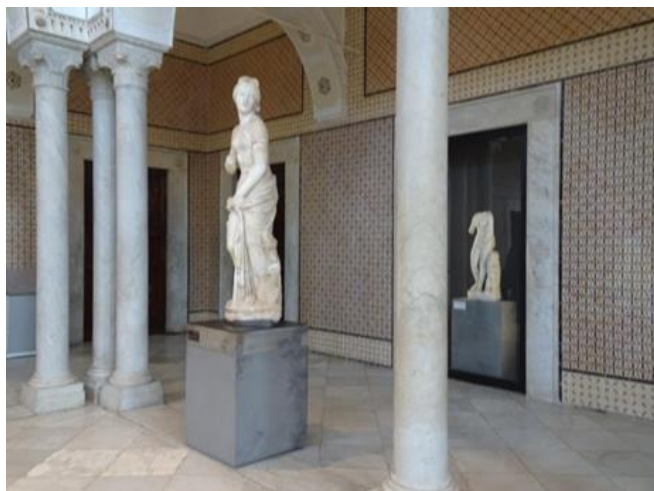


7日目 バルドー博物館

北アフリカ随一と言われるフェニキア・ローマ時代のモザイク收藏数を誇り、「アフリカのルーブル美術館」と称される国立バルドー博物館を見学しました。



ここはオスマン帝国時代にチュニジアを統治していたベイ（地方長官）の宮殿だったため、内部には美しい天井装飾などが残されている世界有数のモザイクの博物館です。



有名なホメロスの叙事詩の中でオデュッセウスがセイレーンの誘惑と闘う姿を描いたモザイクは代表作です。



バルドー博物館には、その他にも「詩人ヴェルギリウスの肖像」など、名作が溢れています。



バルドー博物館は、2015年のテロによって日本人旅行客3名を含む18名が殺害された博物館として記憶されていますが、今もその銃弾の痕跡が残されています。



楽しい思い出とともに帰路へ

さて、チュニジアの旅が終わりましたが、この国はリビアとアルジェリアという大国に隣接していますが豊かな歴史を持った国で十分な存在感がありました。

2011年1月の「ジャスミン革命」と2015年バルドー博物館のテロ事件で「チュニジアは危ない国だ」と思われて国を閉じてから約4年、今では失業率も減少し、平和が回復されてきています。

心残りではありますが、チュニス発のエミレーツ航空 EK0748 / B777-300 機でドバイまでフライトをし、ドバイで乗り換えて、エミレーツ航空 EK0748 / A380 機で日本（成田）へ無事に帰ってきました。

エアバス A380 は新鋭機で音や振動も小さく乗り心地は最高で「これはいい！」と思いましたが、翌日のニュースでエミレーツ航空が発注したエアバス A380 の納入残をキャンセルすると報じていました。

A380 豪華旅客機を買い過ぎたのですかね？ なかなか思い通りにならない世の中ですね。